阪大 NOW
―地域に生き世界に伸びる―

80th 原点へ ANNIVERSARY 未来へ 2011
OSAKA UNIVERSITY

OSAKA UNIVERSITY 1
2011/No.122

年頭所感 2011

大阪大学総長 鷲田清一

大阪大学は本年創立80周年を迎えます

80th 原点へ ANNIVERSARY 未来へ 2011
OSAKA UNIVERSITY

原点へ・未来へ

―― 年頭所感2011 ――

みなさん、明けましておめでとうございます。

2011年、わたしたちはいよいよ創立八十周年の年を迎えることになりました。八、それはまさに末広がりを表わす縁起の良い数字でもあります。大阪大学がいま刻もうとしている新しい歴史とはどういうものかを再確認するために、わたしはこの正月、三十年近く前に刊行された『大阪大学五十年史』をあらためて読みなおしておりました。山村総長をはじめ、当時の全学の教員代表らが手分けして執筆した、あの二段組で550頁を超える記念誌を、です。

この記念誌を開いたのは、1931年に医学・理学の二学部からなる全国でももっとも小規模な帝国大学として出発した大阪大学が、いまでは11学部、16研究科からなる、そして学部学生数では国立大学最多の総合大学にまで発展してきた、その精神的な原動力がどのようなものであったのかを突きとめたいと思ったからです。

いくつかの言葉がきらきら輝いて、わたしの心を灯しました。歴代総長が述べられたその印象的な言葉をいくつか引かせていただきます。

初代総長、長岡半太郎先生は、理学部創設時を回想して、次のように述べておられます。大学の特色は「教授研究の特色である。特色なき平凡の教授は歓迎されない。大学もまた平凡化するからである」、と。比類なきものをめざすという、創立時の息吹がつよく感じられる言葉です。

第三代総長の真島利行先生は、終戦後二ヶ月にして、倒壊した大学の復興に着手するだけでなく、さらに前向きに学内体制の抜本的な刷新を企てられました。そして、大阪帝国大学評議会の名で文部大臣宛てに、人文系学部新設の建議書をしたためられ、大阪大学を真の総合大学として完成させようとされました。その建議書のなかで、大阪の近世以来の学問伝統からして、総合大学への発展は必然のものであると説き起こし、こう述べておられます。「大阪は、我が国上代文化発祥の地にして、近世に於ける商都としての繁栄は、関西に於ける一大中心として、其の独特なる文化を構成したるが、西に彼の懐徳堂は、

東の昌平黌に対し、堂々たる地歩を学界に占めたり」、と。これを書かれた真島先生の心は、官学に拮抗するもう一つの本格的な学問の地として大阪をとらえ、現代その町を象徴する学術機関がほかならぬ大阪大学であるという、気高い自負に満たされていました。

そして創立五十周年の記念式典、そのご挨拶のなかで第十一代総長、山村雄一先生は、大いなる誇りを胸に、次のように述べられました。「大阪大学は、国はもとより地元大阪の強力な支持の下に創設され、その後も地域社会との深いかかわり合いを持ち続けながら発展してきた。古さと新しさ、伝統と創造、独立独歩の町民の意識と近代的科学精神などが入りまじって綾をなしてこの大阪大学の五十年の歴史を支えてきた」、と。

「非凡」を唱われた長岡総長の言葉から「独立独歩」の気性を愛でられた山村総長の言葉まで、これらに共通するのは、比類のない「独自性」の主張です。戦後、新制の国立大学の多くがかつての武士の学舎（まなびや）である藩校をルーツとして設定したなかで、大阪大学は適塾と懐徳堂という二つの町民の塾をみずからの原点・源流として位置づけました。学問の先端性と独立独歩の町民の感覚とが一体となっているところに、大阪大学の研究・教育の特色があるとしたのです。大阪大学はしばしば「実学」志向が強いといわれてきましたが、この場合の「実学」が、けっして「役に立つ応用的学問」という意味ではなくて、適塾に学んだ福澤諭吉がそう考えていたように、同時代が抱え込む問題から眼をそらさず、それに正面から取り組むような学問という意味でいわれているとすれば、大阪大学は胸を張って「そう、阪大は実学を大事にします」と言うべきだろうと思います。

大阪大学はかつてそうした精神の下に、サイエンスとエンジニアリングを総合する基礎工学部や、文系と理系を交叉させる人間科学部といった、来るべき時代の課題を先取りするような学部を創設してきました。

法人化後の大阪大学が、研究においても教育においてもさらには大学運営や社会との連携においても、他大学に追従するようなプランは選ばずに、あえてつねに他ではまだ試みていないような取り組みを心がけ、「阪大スタイル」という名でもって、いずれ全国の大学のモデルともなりうるような阪大独自の先駆的な取り組みをしようとしてきたのも、比類ない独自性をめがけるというこの伝統をつよく意識してのことでした。

一例をあげれば、法人化後2年目に、全国に先駆けて、大学院における高度教養教育・コミュニケーション教育の必要を認識し、それを担うコミュニケーションデザイン・センターを設置しました。高度な専門課程に進めば進むほど「教養」が必要になるという、この「高度教養教育」の考え方は、近年、他大学も導入するようになり、まさに「阪大スタイル」がモデルとなった一例です。研究面では産学が連携しての「共同研究講座」やCLIC（イノベーション創出若手研究人材養成プログラム）、初年次の全学共通教育では「基礎セミナー」、キャンパス環境では「スチューデント・コモンズ」、社会連携では「社学連携」という全国初のコンセプトで展開している「21世紀懐徳堂」プロジェクトなど、次々と阪大独自の取り組みをしてきました。

このたびの創立八十周年事業のタイトルは「原点へ・未来へ」というものですが、大阪大学の未来像はほかならぬ大阪大学自身の精神の原点に還り、それを跳躍台とすることによって描かれる、という意味で言っています。科学的精神とそれにもとづく徹底して合理的な知を追求すること、あわせて深い徳と教養を磨くこと、この二つをともにめざした適塾と懐徳堂の精神という希有な原点を、大阪大学はいまあらためて思い起こし、これを現代にふさわしく大きく飛躍させてゆかねばならないということです。

かつて大阪町民が生んだあの自由な学術の場を、ここ大阪大学にふたたび花咲かせるために、わたしたちの先輩たちは懸命な努力を続けてきました。教育と研究と社会貢献の質を比類のないレベルにまで

高めること、このもっとも基本的な努力に大阪大学の将来は懸かっています。世界トップレベルの研究、すでに大阪大学の伝統となっている未知の融合研究領域の創出、「教育の阪大」とまで言われるようになった教育熱心な校風、大学院レベルでの教養教育の重視、産学連携と社学連携の両輪で進む活発な社会貢献など、大阪大学が近年とくに力を入れてきた特色ある教育・研究の活動を、大阪大学はいま、「阪大スタイル」として確立させるべき時期にきているのです。

このことをあらためて阪大の全構成員で確認しようと、わたしたちは創立八十周年を迎えるにあたって、「原点へ・未来へ」というタイトルを掲げたのです。その意味で、創立八十周年の記念事業を、豊中キャンパスのイ号館の「大阪大学会館」への改修とともに、ことしの上半期の最大のイベントとして、まずはぜひとも成功させたいと思っています。

ご存じのように、国立大学は法人化後、財政的にひじょうに苦しい方向に押しやられつつあります。評価、法務、リスク管理、安全管理、情報公開、広報といった、国立大学時代にはなかった業務が格段に増えたにもかかわらず、運営費交付金のほうは毎年1%ずつ削減され、今年度はついに1.8%の削減、そして来年度も1.6%削減という厳しい状況にあります。科学研究費補助金は来年度若干の増額にはなりますが、大学がその使命を果たすための基盤的経費ともいえる運営費交付金は、減額される一方です。そのようななか、経費削減への対策を一時たりとも停止することは考えられません。そうした余裕はいまの国立大学法人にはありません。

じつは先日、英国にいる知人から衝撃的なニュースが届きました。英国政府は、年間11兆円という構造的な財政赤字を解消するために昨年10月に、今後4年間の「包括的歳出見直し」案を発表しましたが、その詳報が届いたのです。政府は各省庁の予算を平均19%削減するよう指示したのですが、高等教育関係予算を見ると、4年間で25%の削減――来年度はマイナス6%、インフレ率を勘案すると約8%削減――が義務づけられています。とくにイングランド地方では、大学への運営費交付金は来年度から4年かけて段階的に40%削減されることになりました。科学研究予算、とくに国家戦略的重点科目とされるバイオ科学、医学、工学、数学への運営費交付金は現状維持ということですから、結果として人文・社会科学への運営費交付金はゼロになるとされています。研究費は実質、授業料だけで賄われることになるのです。そのために授業料の大幅値上げが

避けられず、その上限枠はほぼ現在の 2 倍の額に設定しなおされました。同時にこうした事態に対処するため、大学間の連携やハブ化の動きが加速しているようです。英国における「大学の機能別分化」（Mission Differential）は、こうした予算削減という事態との関連で議論として浮上してきていることに注意深くある必要があります。

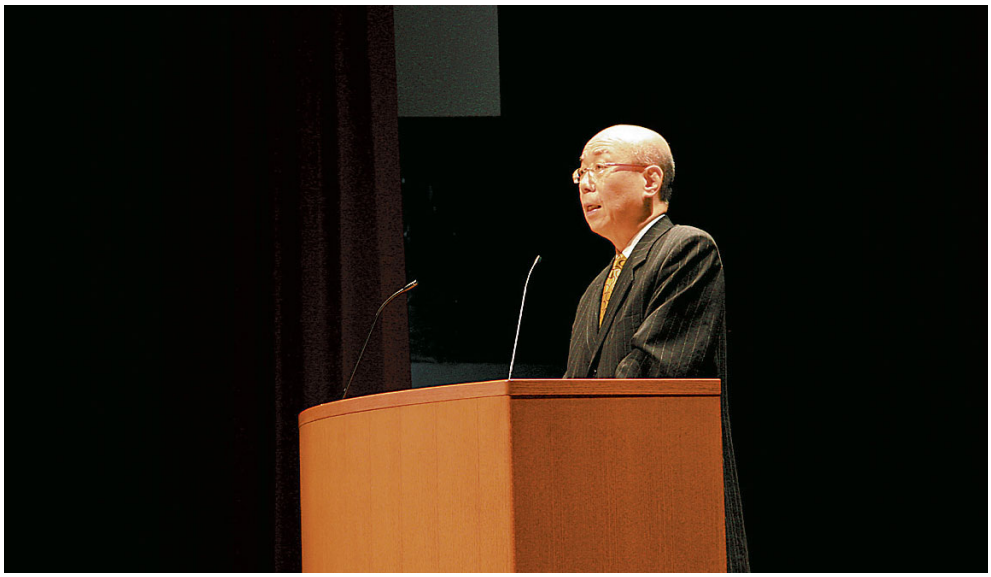
こうした流れがいつ日本の国立大学を襲うか、いまの国家財政の窮状を見ているかぎり、予断を許しません。大阪大学の「事務改革」も、各部局の教育・研究体制の改革も、待ったなしで進めなければなりません。同時に、法人化後の大学職員に求められる能力を育成するための研修やスタッフ・ディベロップメントも、より充実したものに刷新しなければなりません。大学の未来を担う若手研究者の支援やその研究環境の改善、さらには昨年の不正経理発覚後にわかに課題として浮上した法人教職員の倫理の徹底、これらもまたわれわれが設定している待ったなしの取り組み課題です。

そして最後に、総長就任直後に実現した旧大阪外国語大学との統合の効果を今後具体的にどのように活かしてゆくのか、その新しい仕組みとロードマップを作成することを、今年上半期に仕上げるべきもっとも大きな課題の一つとして挙げておきたいと思います。この三月で、外国語学部旧課程の学生が、一部を除いて卒業します。国立大学で唯一外国語学部を擁する総合大学である大阪大学を卒業した学生さんは、さすがに外国語がよくできる、国際感覚に優れていると、社会から評価してもらえるよう、大がかりな語学の教育改革をします。そのことで、国際社会で粘り強く活躍するような知的体力、つまり耐性のある知性を育みたいのです。その具体的な構想については昨年より関係部局とも相談しながら煮詰めてきましたが、来年度早々にはその全容を全学のみなさんにお示しすることができるよう目下、最後の調整に入っております。そうした語学教育の改革のために、そして現在は箕面地区で学ぶ外国語学部生の修学環境の改善のためにも、外国語学部の吹田キャンパスへの移転の「青写真」を今年前半にはまとめたいと思っています。

以上、最後は駆け足で来年度に向けての課題とそれへの取り組みについて大きく述べさせていただきました。これにもとづき、「大阪大学活動方針 2011」では、本年とくに力を入れることとして、以下のような取り組みをあげております。

□外国語学部を持つ国立総合大学としての大阪大学だけに可能な、個性ある言語教育と国際教育の実現を図る。

□大学院高度副プログラムを充実し、新たに副専攻制度を開始することにより、学際的知識、複眼的視野、グローバルな視点を重視する教育を拡大する。



□大阪大学独自の教養教育と高度教養教育を学部生に対して展開するとともに、大学院生を対象とする高度教養教育を推進する。

□新設のインターナショナルカレッジの活動を本格化し、グローバル 30 学部コースの〈化学・生物学複合メジャーコース〉と〈人間科学コース〉を確実に運営するとともに、大学院コースの充実を図る。

□外国人・留学生のためのサポートオフィスの継続的運営を進めるとともに、短期学生受入・派遣プログラムの充実化に全学的に取り組む。

□科学研究費補助金、大型プロジェクト研究費等の獲得をめざした企画強化と全学的な支援体制の確立、および研究力のさらなる向上に資する支援組織の強化を図る。

□若手研究者が「ときめき」をもって研究を実施できるよう研究活動の支援を強化する。

□テクノアライアンス棟を最大限に活用し、産学連携活動を強化する。とくに産学連携活動の組織体制の一層の強化を図ると同時に、「共同研究講座」制度を更に発展させた協働研究所・協働ユニット等の新たな企画を推進する。

□中之島センターにおいて大阪大学 21 世紀懐徳堂を窓口とする社学連携事業を推進するとともに、「21 世紀の懐徳堂プロジェクト」事業をセンターに誘致するなど連携を図る。

□再構築した大学広報ネットワークを活用し、情報ネットワーク、情報マネジメントの強化を図り、外部に対し積極的な広報を行うとともに、構成員に対する広報を強化する。

□学校教育法施行規則等の一部を改正する省令の施行に伴う大学の教育情報の公表の促進を図る。

□海外教育研究センターをハブとした重点的交流推進校のネットワーク構築に努め、それに基づく学生・教職員交流の促進を図る。

□財務基盤の安定化のため、平成 21 年度に創設した「大阪大学未来基金（大学）」の拡充を図るとともに、教育支援などの基金による事業を行い、大阪大学に自らの寄付金により後進を育てるという文化を定着させる。

□事務組織のスリム化を図るため、本部事務機構の管理職ポストを削減するとともに、学内組織について事務組織の共通化を推進する。

□キャリア形成支援等による女性研究者の活躍促進、および障害者雇用推進のための職域拡大等に努め、より一層多様な人材の活用を推進する。

□「大阪大学職員像」に基づき職員の育成を図るため、階層別研修の体系化などにより研修の充実を図るとともに、適切な助言者を養成することなどによりオン・ザ・ジョブ・トレーニング（OJT）の充実を図る。

□全学統一の新任教員研修を実施し、大学を支える優れた人材育成の一助とする。

□標準化・IT 化・一元化をベースに定型業務の効率化を図ることにより、部局および本部において重要施策や企画業務に投入しうる人的・財政的余力を生み出し、大阪大学の教育・研究・社会貢献活動の格段のレベルアップを可能にする事務体制と業務手法を確立する。

□老朽化建物の耐震改修・リニューアルを進めるとともに、テクノアライアンス棟、免疫学フロンティア研究センター棟などの施設整備を通じて、大阪大学の教育・研究・社会貢献の活動のさらなる強化をめざす。

□温室効果ガスの削減に向けて、学内における推進体制を整備し、実効性と継続性のある低炭素化対策のための取組みを進める。

□教職員・学生の保育支援を充実させるため、吹田地区保育園の定員を増やすとともに、豊中地区に新たに保育園を整備する。

□教育研究活動等の更なる充実・活性化を図るため、全部局を対象として、評価室と部局との達成状況評価等に係る意見交換を行う。

□本学において二度と研究費の不正使用が生じないよう、教職員の不正使用防止に向け誠実に行動する意識の一層の向上を図るとともに、監査体制の強化や納品検収体制の充実など、再発防止に万全を図る。

□講習会、講演会等の普及啓発活動を通じて学生、教職員の危機管理意識の高揚を図り、学内の安全管理に関する責任体制を確立する。

□最新の情報通信技術の活用により、先進的な情報システムを整備するとともに、より高度の情報セキュリティを確保する。

教員、そして職員のみなさんには、いまの大阪大学が抱えるこれら大きな課題への認識をぜひ共有していただきたいと思います。そしてそういう認識に立って、それぞれの持ち場にありながらも、つねに大阪大学が置かれている状況の全体に目配りしつつ行動するようなマインドをもっていただきたいと、つよく願っております。

はじめにも申しましたが、この春、大阪大学は創立八十周年を迎えます。それを記念してこれまで、さまざまのプレイヴェントや記念事業を計画してまいりました。この記念事業の核になるのが、旧制浪速高等学校校舎（イ号館：登録有形文化財建造物）をあらたに「大阪大学会館」として再生させる事業です。大阪大学と関連の深い多くの企業の篤いご支援を得て、ようやっといま実現への最終コーナーを回りつつあります。イ講堂も「大阪大学講堂」として蘇ります。同時にその周辺、さらには中山池東岸のプロムナードの整備も完了します。大阪大学の〈象徴〉となるその建物は、創立八十周年記念式典の翌日、5月2日に披露されます。

そのほかにも、免疫学、ナノテクノロジーおよび世界言語研究の3分野での国際シンポジウムの開催、大阪大学出身の経営者が一同に会するプレジデント・サミットの開催、学生による O+PUS 映像コンテスト、大学風景を撮した写真集『OU Days』や阪大の学問のおもしろさを紹介する『ときめきサイエンス』の刊行など、さまざまな企画がいま進行しています。5月1日に大阪国際会議場で催される記念式典には、教職員から学生まで、一人でも多くの大阪大学構成員の方々にお集まりいただき、「大阪大学があるということ」をともに歓びたいと願っています。

大阪大学総長

鷲田清一

インフォメーション

記　念　講　義

平成23年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局（講座・部門等）	氏　名	日　時・場　所	講　義　題　目
法学研究科	末　永　敏　和	1月28日（金）10:30～12:00 法経講義棟2番講義室	私の商法遍歴
国際公共政策研究科	髙　阪　　章	2月18日（金）13:00～14:30 国際公共政策研究科 講義シアター（2階）	Money and Capital: We're Not in Kansas Anymore
生命機能研究科 生体ダイナミクス講座 非平衡物理学研究室	木　下　修　一	3月11日（金）17:00～18:00 生命機能研究科 ナノバイオロジー棟 3階セミナー室	「光と緩和の揺らぎ」

平成２２年度　大阪大学卒業式・大学院学位記授与式

今年度の卒業式・大学院学位記授与式を次により挙行いたします。

日　時：　平成23年3月25日（金）　11時00分～12時30分　9時30分入場開始　10時30分入場完了

場　所：　大阪城ホール（JR環状線「大阪城公園」駅下車　徒歩5分）

※開始30分前までに入場完了願います。遅刻された場合、式場への入場をお断りする場合がありますのでご注意下さい。

※同伴者の方は2名までとさせていただきます。また、入場には整理券が必要になります。（整理券の配付方法については後日、卒業予定者・修了予定者の方に学生専用HP「KOAN」を通じてお知らせする予定です。）

※車での来場はご遠慮下さい。

〈問い合わせ先〉　総務部総務課総務係　TEL：06－6879－7014

表紙写真：創立80周年記念バナーと中之島　　表紙デザイン：ウェブデザインユニット

大阪大学の学章をモチーフに、創立80周年の記念事業タイトル「原点へ・未来へ」をふまえ、創立80周年記念のロゴ・マークが制定されました。

ロゴ・マークは黄金比率の「祝祭の旗」であり、基本的な色彩は「祝いの紅白」としています。また、バナーについては、このロゴ・マークを「翻る」ことを想定し、作成しました。

今後、創立80周年記念事業の実施期間中、ロゴ・マークやバナーを積極的に用い、大阪大学創立80周年記念プログラム、平成23年度の入構・駐車整理券など、さまざまな場面で大阪大学の創立80周年をアピールしていきます。

また、背景の写真は「中之島」となっています。本学は、在阪企業との産学連携事業、21世紀懐徳堂はじめとする社学連携事業、さらには地域の文化機関、国際的な文化機関としての大学の役割を積極的に果たしていくために、阪大の創設の地である「中之島」への回帰を図ります。

阪大NOW　No.122　2011 1月号　　2011年1月20日発行

編集　大阪大学広報・社学連携室

発行　大阪大学企画部広報・社学連携事務室　〒565-0871　大阪府吹田市山田丘1-1

TEL：06（6879）7017　FAX：06（6879）7156

ホームページアドレス　http://www.osaka-u.ac.jp/

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせにつきましては、下記までお寄せ下さい。

E-mail : ki-kousyagaku-kouhou@office.osaka-u.ac.jp

この冊子は人類環境浄化のためのエコー認定の再生紙を使用しています。

000530